

伊東信宏 企画
三輪眞弘+前田真二郎
モノローグ・オペラ「新しい時代」

作曲・脚本・音楽監督:三輪眞弘
演出・映像:前田真二郎

<出演>

14歳の少年信者:さかいれいしゅ
儀式を司る4人の巫女(キーボード):
岩野ちあき、木下 瑞、日笠 弓、盛岡佳子
(大阪大学『記憶の劇場』プロジェクト受講生有志)
信者1(映像オペレーター):古館 健
信者2(音響オペレーター):ウエヤマトモコ
信者3(ミキシングオペレーター):大石桂誉

<スタッフ>

メディアオーサリング:古館 健
グラフィック:岡本彰生
フォルマント音声合成:佐近田展康
音響:ウエヤマトモコ
照明:畔上康治(愛知県芸術劇場)
衣裳・ヘアメイク:岩井亜希子
舞台監督:山口弘晃(金井大道具NAGOYA共同企業体)
テクニカルコーディネート(舞台):世古口善徳(愛知県芸術劇場)
テクニカルサポート:大石桂誉
技術協力:松本祐一
広報メインビジュアルデザイン:岡澤理奈
制作・演出助手:福永綾子(ナヤ・コレクティブ)
プロデュース・制作:藤井明子(愛知県芸術劇場)、
宮地泰史(あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール)

このコンサートは公益財団法人サントリー芸術財団の推薦コンサートです

テクノロジーと実在／声をめぐるこのオペラの音楽については17年前から変更はない。しかし今回、初演時には技術的に不可能だった大きな夢が叶えられた。つまり、主人公の歌声の「キャプチャー」や、その声が「神の旋律」を取り込まれていく物語の過程を生声のサンプリング(録音)ではなく、すべて人工的に合成した音響(声)によって実現したのである。フォルマント兄弟の弟、佐近田展康なくしてはあり得なかつた今回の再演は、そのような意味でわめて高度なデジタル技術を駆使した、ライブ・パフォーマンス(歌唱)と映像を伴う「コンピュータ音楽」となった。それは、刺激的な音響で人を圧倒したり驚かせたりするようなものではないとしても、「機械」が今、ここまで人間に「近づいて」きたことを密かに暗示してくれるだろう。

三輪眞弘

テクノロジーと実在／声をめぐるこのオペラの映像については17年前から変更はない。しかし今回、初演時の機材を発掘して映像演出を再現することはせず、この時代の標準的な機材でシステムを組むことにした。もし、初演と同じ機材でスクリーンに映像投影したら、企図に反して古びた印象になつたはずだ。この17年に渡ってデジタル技術は飛躍的に発展した。映像分野だけでなく、日常生活にインターネット環境が浸透したことが大きい。次々と新たな製品やサービスが登場する中、今年、元Googleのエンジニアが、神は人工知能(AI)と標榜する宗教団体を設立したそうだ。本作は、狂信する少年の悲劇であると同時に、それへの問い合わせであり、我々の内にある「テクノロジーに対する信仰」について、思いを巡らせる契機となるだろう。

前田真二郎

『新しい時代』の再演に

伊東信宏

三輪眞弘(脚本、作曲)と前田真二郎(演出、映像)による『新しい時代』は、22世紀クラブの委嘱によって書かれ、2000年4月に京都(アルティ)と東京(紀尾井ホール)で上演された。「オペラ」を書いて欲しいという委嘱に、三輪さんは戸惑つたのではないかと思う。19世紀の作曲家のように、登場人物が歌いながら愛し合い、歌いながら死んでゆくような劇音楽を平気な顔をして書くには、三輪さんは繊細すぎ、知的すぎた。そもそも「歌」などというものを作ることもできなかつた、と三輪さんは書いている。「憧れ」が破壊し尽くされた後、「歌はうそ臭くわざとらしい様相を免れない」というのだ。

三輪さんは、1996年に、約18年におよぶドイツ滞在から帰ってきたばかりだった。日本に帰って、三輪さんは、その音楽の状況、社会の状況にほとんど絶望したのだと思う。音楽の世界では、続々と「衝撃的新作」が発表され、そして何事もなかつたかのように消費されてゆく。当該の新作のまわりを、これが革命的に斬新であり、社会の変動を見事に写し取つていて、音楽界に後戻りできない衝撃を与える、と語る言葉が取り巻いているだろう。だが、実際にはそんなことはまず起こらない。言葉はなめらか

に紡ぎ出され、なめらかに聞き流されて、なめらかに忘れ去られていく。そんな中で帰国後初めて書かれた作品「言葉の影、アレルヤ」(1998年)は、一つの灯籠とそれを取り巻く4人のキーボード奏者のための音楽である。灯籠には楽譜が映し出され、その指示に従つて4人の奏者が単純な旋律を紡いでゆく。すると、或る一瞬、4つの音が組み合わさって、「言葉」が浮かび上がる。それは行き交う言葉に絶望し、歌を書けなかつた三輪さんに代わつて立ち上がつた何者かが発したギリギリの声のようだ。この作品はオペラの冒頭にそのまま取り込まれ、音楽的な基層を成すことになる。

一方で、現実世界の、特に三輪さんが18年ぶりに体感したはずの日本では、それまでには考えられなかつたような事件が次々と起つていて。三輪さんが帰国する1年前である1995年は、地下鉄サリン事件と阪神淡路大震災の年であり、そして1年後の1997年には神戸連続児童殺傷事件が起つていて。

このオペラの主人公は、14歳の少年である。ストーリーは、この少年がネット上に漂う情報の中から「新しい時代」の神のメッセージを聞き取つて、ネットワークの中に自分という存在の情報を解放し、そして余剰になつた自分の物理的存在を「消去する」(つまり自死する)というものだ。この物語が、上記の幾つかの事件を濃厚に反映していることは明らかだろう。

三輪さんが全部自分で書いたという少年の手記の言葉は、その切実さも、子供っぽさも、純粋さも、そして自己顯示的なあざとさも全て含めて、あまりにリアルだった。そのリアルさを、今の若者が実感するのは、難しいかもしれない。だが、このオペラの中で三輪さんと前田さんが示した直観は、今や加速度的に重要さを増してきているように思われる。

ここで扱われているのは、機械(コンピュータ)が人間のように歌つたり言葉を発したりすること(つまり機械の人間化)、そしてそれと呼応するよう人に機械のようにデータ化され、振る舞うこと(つまり人間の機械化)、という逆方向だが相似的な現象の、妖しさと危うさだった。三輪さんのその後の活動も、まさにこの方向に向かつてより先鋭的になってゆく。「フォルマント兄弟」(2000年結成、三輪眞弘と佐近田展康とのユニット)の試みは、機械に言葉を語らせ、歌わせることをめぐるものだった。一方で、「逆シミュレーション音楽」と名付けられた一連の作品(2002年の「またりさま」がその原型である)は、人間にコンピュータの一素子として振る舞うことを要求するものである。

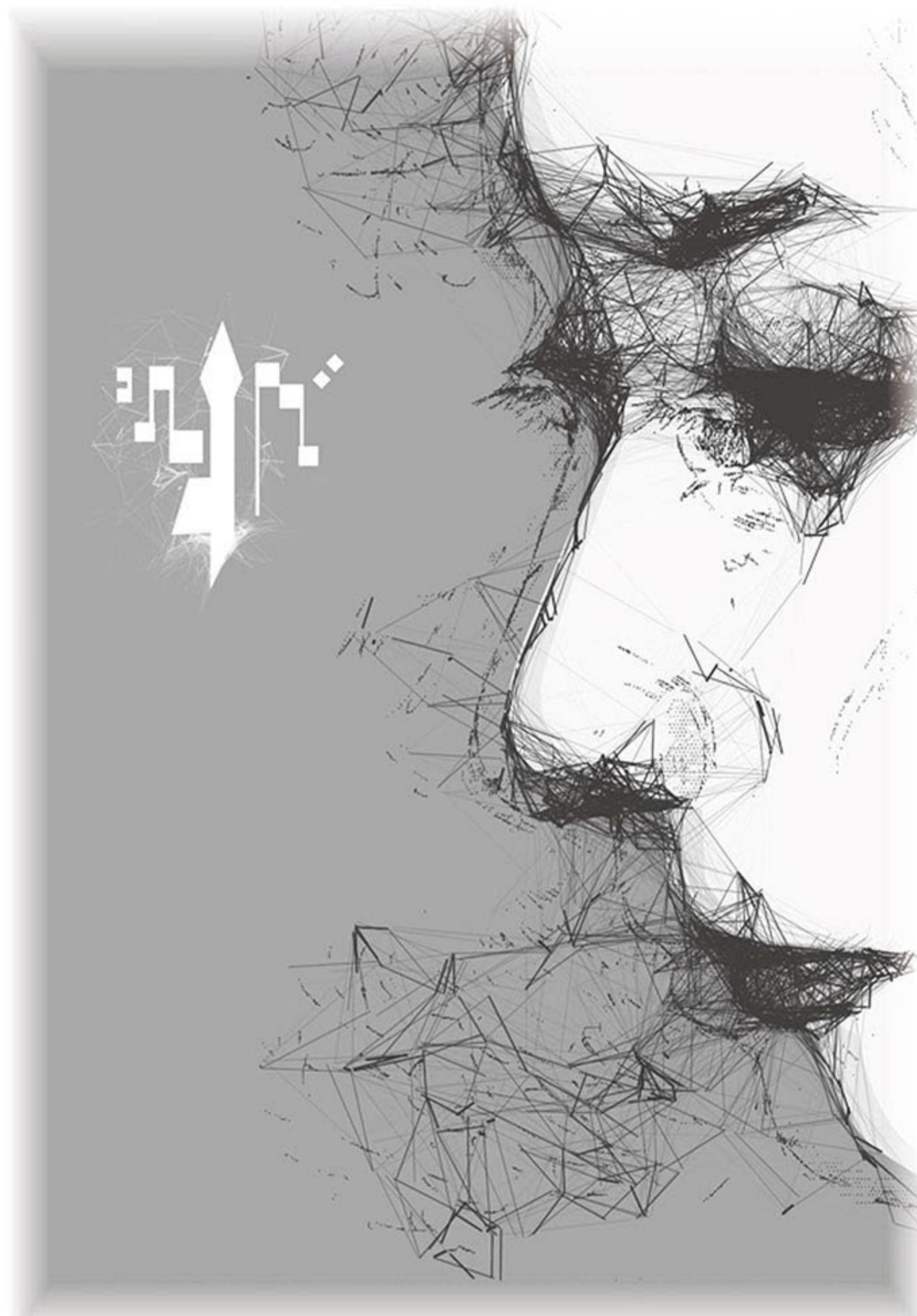
考えてみれば、実社会の方も、この人間と機械の間の危うさに向けて傾斜を深めているようだ。ヴォーカロイドに夢中になる若者たち(機械の人間化)、Perfumeのケロケロ声(人間の機械化)。電車や授業中にふと周りを見渡すと皆、スマートフォンを覗き込んでいる。そしてスマホの中の自己像の方が、実世界の自分の姿よりも大切で切実だ、と思う人々はどんどん増えているようだ。世界は、誰かのコンピュータの中のシミュレーションなのだ、という話が真剣に議論されている(「シミュレーション仮説」)。みんな、もう「新しい時代」を生きている。

17年前の三輪さんと前田さんの直観に、もう一度じっくり向き合わねばならない。

いとう・のぶひろ(大阪大学教授・
あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール音楽アドバイザー)

注目アーティストシリーズ68

伊東信宏 企画
三輪眞弘+前田真二郎
モノローグ・オペラ「新しい時代」



三輪眞弘(作曲・脚本・音楽監督)
Masahiro Miwa (Composer, Scriptwriter, Music Director)
1958年東京生まれ。1974年都立国立高校入学以来友人と共に結成したロックバンドで音楽活動を始めます。1978年渡独、国立ベルリン芸術大学で作曲をイサン・ユンに師事。1985年より国立ロベルト・シューマン音楽大学でギュンター・ベッカーハーに師事する。佐近田展康と共に「フォルマント兄弟」としての創作・思索・講演活動や、CDアルバム「村松ギヤ(春の祭典)」(2012)リリースなどの活動は多岐にわたる。著書に「コンピュータ・エイジの音楽理論」(1995)、さらに「三輪眞弘音楽藝術一全思考1998-2010」により2010年度第61回芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。現在、情報科学芸術大学院大学[IAMAS]教授。旧「方法主義」同人。
<http://www.iamas.ac.jp/~mmiwa/>

前田真二郎(演出・映像)
Shinjiro Maeda (Director, Video producer)
1969年大阪生まれ。映像作家。情報科学芸術大学院大学[IAMAS]教授。映像メディアを「未知を発見する道具」と捉え、実験映画、ドキュメンタリー、メディアアートなどの分野を横断し、イメージフォーラム・フェスティバル、山形国際ドキュメンタリー映画祭、恵比寿映像祭などで映像作品を発表。舞台や美術などの他領域アーティストとのコラボレーション、上映会の企画なども少なくない。映像レーベル SOL CHORDを監修、WEBムービー・プロジェクト“BETWEEN YESTERDAY & TOMORROW”が第16回文化庁メディア芸術祭・アート部門優秀賞を受賞。
<http://maedashinjiro.jp/>

さかいれいしゅ(ソプラノ) Reisiu Sakai (Soprano)
石川県生まれ。武蔵野音楽大学で声楽を佐伯真弥子氏に、IAMASでアルゴリズミックコンポジションを三輪眞弘氏に師事。詩人の松井茂と詩と声のユニット「PreAva」を結成(2006)。声をテーマに活動しこれまでに幸村真佐男、銅金裕司、吉野裕司、真鍋大度、シマカワコウヂ、トリ音、ロイヤルハントングスほかさまざまなアーティストとコラボレーションを行つてきた。金沢大学能登里山里海マイスター育成プログラムを修了し(2014)、里山で子どもと大人が楽しめる演奏会やアートイベントを企画している。「2016年3月能登、さかいれいしゅ。」(限定49枚)をリリース。
[http://reisiu.sakura.ne.jp/wordpress/](http://reisiu.sakura.ne.jp/)

岩野ちあき Chiaki Iwano 大阪府生まれ。神戸大学発達科学部人間表現学科卒業。在学中、ドイツ・ハンブルク大学へ留学すると共にInternational College of Music Hamburg ピアノ科 Senior study program修了。第18回ショパン国際ピアノコンクール in Asiaでアジア大会アマチュアソロA部門銅賞。現在は演奏だけでなく、教育やアートマネジメントなど、多方面から音楽と社会との関わりについて研究している。神戸大学大学院国際文化学研究科芸術文化論コース博士課程前期課程在学中。大阪大学『記憶の劇場』受講生。

木下瑞 Mizuho Kinoshita 奈良県育ち、京都市在住。関西学院大学法学部法律学科卒業。やまと郡山城ホール(奈良県)、京都コンサートホールなどにおいてクラシックコンサートの企画制作業務に携わる。大阪大学文学研究科「芸術計画論」を通じて三輪作品に出会い、2016年12月、伊東信宏企画・構成・レクチャーコンサート「声のよう音／音のよう声 三輪眞弘作品集」(ザ・フェニックスホール)において「言葉の影、またはアレルヤ」に巫女の1人として出演。



主催 あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホール

音楽アドバイザー 今井信子 伊東信宏 渡邊規久雄

協賛 鹿島

助成 Asahi アサヒグループ芸術文化財団

協力 情報科学芸術大学院大学 [IAMAS]

大阪大学『記憶の劇場 II』プロジェクト

共同企画 愛知県芸術劇場

22世紀クラブ委嘱作品(2000年)

MS&AD あいおいニッセイ同和損害保険株式会社は、あいおいニッセイ同和損害保険ザ・フェニックスホールをフェニックスホール内に設けています。
芸術・文化の発信基地として、関西の芸術文化発展に寄与しています。

Nobuhiro Ito presents

Masahiro Miwa+Shinjiro Maeda,
The Monologue Opera “The New Era”

2017年12月16日[土]
会場 あいおいニッセイ同和損害保険ザ・フェニックスホール
16:00開演 / 15:30開場